

第3回山武地区地域協議会 記録

1 日 時 令和5年9月19日(火) 午後2時から午後4時まで

2 場 所 城西国際大学 本部棟8階会議室

3 出席者 14名/20名

4 概 要

(1) 第2回山武地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

(2) 「県立学校改革推進プランに係る評価」の実施方法について

資料1「県立学校改革推進プラン」・「第1次及び第3次実施プログラム」における評価について事務局より説明

【座長】

前回の協議会において質問があった件について、補足説明をしてもらった。質問があればお願いしたいがいかがか。

(特になし)

(3) 「教員基礎コース」追跡調査について

資料2「県立学校改革推進プラン」に基づき実施した「教員基礎コース」の追跡調査について事務局より説明

【座長】

事務局より前回できなかった詳細な説明をいただいた。質問があればお願いしたいがいかがか。

(特になし)

(4) 山武地区に所在する県立高校の志願状況等について

【座長】

山武地区に所在する県立高校の状況についてだが、既にこれまでの協議会で事務局から山武地区に所在するそれぞれの県立高校の概要や取組について説明があったところである。議事の進行について、事務局から何か提案はあるか。

≪事務局≫

委員の皆様には、山武地区に所在する6校の県立高校について、各校がより魅力的になるための学び等について御協議いただいているところである。今回は、山武地区に所在する1学年の学級数が3学級以下の県立高校に注目し、今後の在り方について御協議いただきたい。改めて、山武地区に所在する1学年の学級数が3学級以下の県立高校の入試状況等について、説明させていただきたい。

【座長】

ただいま提案のあったことについて、事務局より説明をお願いしたい。

≪事務局≫

資料3 山武地区に所在する県立高校の志願状況等について事務局より説明

【座長】

ただいまの説明について、質問があればお願いしたいがいかがか。

(特になし)

(5) 山武地区に所在する県立高校の今後の在り方等について

【座長】

事務局より説明があったが、ここで取り上げた3校の入試の志願状況及び充足率等を見ると、非常に厳しい状況であることが言える。1学級40名という国の標準法の枠組みの中で考えた場合も、現在の

学校規模が適切なのか、また、生徒たちにとって望ましい学習環境として、高等学校の最低規模とはどの程度なのかなどについて、委員の皆様より意見を伺いたい。

1学年の学級数が3学級以下、つまり県教育委員会が策定した「県立高校改革推進プラン」に示す適正規模を満たさない県立高校の具体的なデメリットや、学級数が少ないことによるメリットもあると思う。その点も踏まえて意見をいただきたい。

【委員】

説明させていただきたいことがあるが、よろしいか。

【座長】

では、説明をお願いします。

【委員】

私立高校の現状についても皆様に御理解いただきたく、説明させていただく。私立学校は、教育基本法において公教育を担う教育機関として、国、地方公共団体、学校法人の三者が設置者として並列して述べられている。つまり、私立と言いつつも完全な民間ではなく、公教育の一翼を担うものとして国が的確に支援を行わなければいけない学校となっている。万が一、私立学校が解散すると財産は全て国有財産となる。江戸時代は全て私立の塾や寺子屋ばかりで、庶民の教育を担っていた。裕福な家庭だけが私立学校に通い、庶民は公立高校だといった認識は誤りであり、もともとは庶民のための学校ということから始まっている。

学費については現在、授業料に対する援助が拡充している。国の修学支援金が私立、公立共に設けられており、千葉県では私立学校の授業料減免制度を設けて、国の修学支援金に上乘せする形で授業料の免除を行っている。基本的に所得の高い家庭には御負担いただくが、通常の所得の家庭では授業料が免除になっている状態であり、ほぼ公立高校と変わらない状況である。私立学校の場合、施設費など授業料以外の費用が掛かるが、千葉県の私立学校の場合は全国と比較しても安価な設定となっており、私立学校が公教育に貢献している状況であることを御理解いただきたい。

千葉県の「教育振興基本計画」において、私立学校は公教育の一翼を担うとしている。幼稚園では9割、高等学校では3割が私立学校に通っているとしており、多くの園児や生徒が私立学校に通っていることを示している。私立が教育の一翼を担うことで、共存共栄を図らなければならないといった教育振興基本計画を千葉県が掲げているので、私立学校の状況を無視して公立高校の状況を論じることはできない。

山武地区の私立高校2校及び海匝地区の私立高校1校の定員の充足状況であるが、令和5年度は各校が定員未充足の状況であり、近年の充足率を見ても全ての学校が充足率100%を割っている。山武地区の2校においては合わせて半分程度の充足率しかなく非常に低迷しており、毎年6学級から7学級が充足していない状況である。公立学校を含めて、この地域で6、7学級かそれより多くの学級数を減らす必要がある。そうでないと、バランスが取れない状況である。私立学校の定員は、千葉県知事が設置する私立学校審議会が地域のニーズを想定して設定されている。私立が持っている教育が十分に活かせないと高等学校の選択肢の幅を狭めてしまう。定員充足率が100%であれば経営が十分に成り立つが、定員を80%まで充足できない状況であると将来のための設備投資ができない。これは私立学校の経営において、将来校舎を建て替える費用がなくなってしまう破綻してしまうことに繋がる。80%から100%の定員が確保できるように地域としても配慮していただきたい。現状は定員を充足できていない状況のため、未来のお金を借金している状態である。その未来が来ると学校が成り立たなくなり、地域から消えてしまうといったことが想定される。実際に千葉県内でも、君津地区や安房地区でも1校ずつ私立学校が消え、別の学校法人の経営に移った事例がある。山武地区でそのような事にならないように、ぜひ御理解いただきたい。まとめると、山武地区及び海匝地区の私立高校で7学級から10学級程度の

定員が充足できないと私立学校の経営が成り立たない。公立学校の定員の設定を含めて配慮いただきたいという事である。

私立学校に入学してくる生徒は、第一志望の生徒と公立学校との併願により公立学校を不合格となった生徒がいる。かつては公立と併願し、公立に入ることができずに入学してくる生徒が多かった。しかし、現在私立学校に入学してくる生徒の多くは、第一志望の生徒たちであり、公立高校を不合格となってくる生徒はほとんどいなくなってしまった。こうしたことから、私立学校の経営が成り立たなくなってきた。千葉県では、公立高校を不合格となり私立高校へ来る状況が通常であり、公立学校で定員に余りが出たり定員割れが出てしまうと、私立高校が厳しい状況となる。公立高校の定員設定にあたっては、私学が確実に人員を確保できるような定員設定に配慮いただきたい。

【座長】

私立学校の状況について説明いただいた。中学生や小学生の人口が先細っていくことが分かっている中、地域の教育をどう考えていくべきか。答えが見えない中での工夫が求められている。県立学校の状況について、実際に運営に当たっている視点から意見を伺いたい、いかがか。

【委員】

3校に共通して言えることは、地域の子どもに地域の学校が学びを提供し、将来地域で活躍できる人材を育成し、地域で活躍してもらうことを考えている。生徒の進路においては、就職する生徒は減少している。一方で、増えてきたのは看護師などの医療系や福祉系、また調理師など目指す専門学校や大学への進学である。進学後は、地元から通える範囲の場所に就業している様子がある。地元には様々な形で貢献できると思う。人口を倍増させることは難しいと思うが、人口減少のスピードを緩やかにし、地元を活性化させることができるのではないかと考えている。

【座長】

急に突き付けられた現実のようでありながら、実は予見できたこともある。では、何ができたのかというと、それもまた難しい質問である。現状や過去2回の協議会と本日の報告も含めて他の委員の皆様からの意見を伺いたい、いかがか。

【委員】

成田空港は現在の就労人口が約4万人のところを、3万人増やし7万人にする想定がある。成田空港を支える地域であるため、成田空港で働く人口が増えると、この山武地域に所在し成田空港で働く人も増えるため、成田空港圏の人材供給源としての山武地域の高等学校の在り方ということも想定できるのではないか。木更津地域は、産業が発展し人口が増加している状況が見られる。同じような発展が、成田空港圏に見込まれる可能性もある。地域の高校が将来、そういった形で人数が増えてくれればと考える。

現状で、私立高校が7学級程度定員割れをしているということは、公立高校が7学級多すぎることである。それを減らしていくとなると、先程の3校の未来だけのことを考えるのではなく、地域全体の中で高等学校がどれだけの規模や数が必要なのかを考える必要がある。部活動等を含め健全な高校生活が行われるためには、1学年6学級から8学級が理想と考える。地域で必要となる学級数を計算し、それを理想の学級数で割ることで必要な学校数は算出される。地域に必要な学級数に私立高校を含めて検討することが必要と考える。そう考えると山武市、東金市、大網白里市に公立高校が1校ずつ所在するのが理想と考える。あるいは、幕張総合高校のように全ての設備が整い、様々な学科があり子ども達が多角的な学びができるような巨大な学校が、将来の地域の人材を担っていくという姿もあり得る。現在の公立高校の校舎は老朽化し、子ども達にとって必ずしも良好な教育環境ではない。新校舎を建設し、子ども達にとって魅力的な学びのある学校を作り、その学校を以て地域の魅力を高めることを想定し計画することも一つの道と考える。小規模校がいくつもあるよりも、ある一定の十分な規模の素晴らしい

学校があり、他の地域から山武地域の学校に生徒が集まるような学校があっても良い。通学の便を考えバスを手配するなどの配慮も必要かもしれない。そういった将来像を考えることも重要ではないか。実現可能かはわからないが、小手先で学校の存続を考えるのではなく、将来的に地域にどのような教育が必要か、公立高校の教育はどうしたら良いのかという視点も必要である。

【委員】

今の意見に共感するところがある。卒業した公立高校の名前が一種のステータスだった時があったと思うが、今はそれが崩れている。学生時代をどこで、誰に、何を学ぶかということに重きを置き、その高校で誰に何を学べるかということに魅力を感じる世代に移っていると思う。今、広域通信制高校が取り上げられることが多いが、コロナ禍によりオンラインに対し抵抗が無くなっている世代が非常に多い。公立高校の在り方を考える時に、何か魅力を発信する大きな転換期なのではないかと考えている。

【委員】

高校は義務教育と違い、輪切りされた生徒が入学してくることで学校ごとに課題が異なる。以前勤務していた高校で「学校には役割がある」と言われたことがある。義務教育の現場で勤務することで、その意味を初めて理解した。やはり、学校ごとに課題は大きく違うと感じる。この時にいつも感じるのは、1学級40人という数字が妥当なのかということ。義務教育も高校と同様1学級40人という定数であるが、1学級28人から32人が最適と考える。採点業務において、1時間で処理できる数が27から30程度である。このことから考えると、子ども達が集まる人数に応じた取組を考えることが、本当の子ども達の目線に立ったものなのではないかと思う。現在、40人を抱える職場で働く人は限られており、工場よりもオンラインでの仕事を希望している人もいる。また、10人未満の少人数単位の仕事により会社を運営している方もいる。働き方も変化してきている。私は、少子化はチャンスだと思っている。大きな学校も大事だし、個に寄り添うような指導やそれを提供できる場など、多様な場を与えてあげることが大切だと思っている。今まで、広域通信制高校を希望する生徒は少なかったが、今は第一希望としている生徒もいる。また、これまであまりいなかった私立学校を第一希望とする生徒も増えてきた。そういった様子を見ると、高校は子ども達が選ぶことができる場であり、魅力的な場をどうするべきか。当然、施設もあり運営していくには費用もかかるが、そういった事も含めて検討して欲しい。今後、日本は少ない人数で頑張っていかなければいけない。一人一人を大切に、丁寧に、生徒たちの資質を伸ばしてあげられるような環境を高校で提供して欲しい。

【座長】

各委員からの意見は、教育のこれからの在り方や可能性、今後を見据えて現状をどう受け止めていくかという視点だと思う。各委員のおっしゃる通り、我々の議論のピントをどこに合わせるのか。これが10年後なのか、または1、2年後で終わるものとして考えていくのかで、議論のベクトルが変わってくる。急には変えられないことや変わらないこと、定めがはっきりしていると、どこにピントを合わせて議論したら良いのか、計画を練る現場の先生方においては、大変苦勞されていることと思う。

一方で、この地域に魅力と価値をどうもたらすかについては、教育現場だけの問題ではなく、全てにリンクしている問題である。先日、アメリカの方と話す機会があり、衝撃的だった話がある。ユニコーン企業と呼ばれる投資や資源が少なくても成長の可能性が期待される先端企業が670社あるとの事であった。日本は7社、中国は190社程度という話を聞いた。一律に比較可能かどうかといった問題はあるが、今は少ないとされる人口が5年後、10年後にあるだろうと思えることも価値ではないかと感じた。このことを含めて、なぜ狭い裾野の中で考えざるを得ない状況なのかは、また別の問題として考えなければならない。

【委員】

先程、委員の発言から学校運営には費用が掛かるとの話があった。高等学校1校に年間5億円から

10億円程度掛かる。3校を1校に統合すると、年間10億円から20億円程度の節約となる。10年間の節約額は100億円となり、更地に新校舎を建設するには十分な費用である。統合により費用が工面されるという側面もある。今、教員のなり手が不足しているが、3校に分散している教員を1校にまとめることで、教員不足の解消にも寄与する。統合のメリットは様々考えられることがある。地域の伝統校が無くなってしまふデメリットもあるが、それを上回るメリットがあり経済的にも理に適っていると考える。そのことを県の方でも分析していただき、経済的なメリットを検討の中に入れておくとういのではないかと考える。

【座長】

では、デメリットや脆弱な部分をどのように補っていくかについて、意見を伺いたい。

【委員】

新聞に文部科学省の教員マッチング支援に関する記事が掲載されていた。教員免許を持っている様々な方に声を掛け、教員不足の課題解決に取り組むといった内容であった。地域の課題解決に向けて、国も力を入れて考えていくのかと感じた。本日も様々な意見が出ているが、人口減少で子どもの数が少なくなっている中で、高校の現状として定員未充足や充足率の低下などの課題がある。そこに予算が掛かってくる。統合についても今回の論点であると思う。地域住民の方々もそうだが、生徒も多様なニーズを持っている。将来の希望について、我々世代よりも現代の子どもの方が低年齢の頃から真剣に進路の研究をしている。子ども一人一人の夢を叶える方向性は必要である。高校は、普通科を持つ学校と専門学科を持つ学校とに分かれている。予算といった枠組みの合理性を求めるとすれば、一つの学校にそういった機能を充実させることを考えることもあり得るのではないかと感じる。

街づくりの観点から考えると、地元の生徒が地元の高校での学びを希望し、その地域を感じながら学習ができる環境は素晴らしいと考える。遠方の学校に行くことはまた別の話であり、子ども達に何らかの選択肢を残してあげたいと感じている。まずは、子ども達の希望が叶えられる仕組みで合理化を図るような検討を進めることが必要である。

【委員】

私は地元から離れた高校へ進学したが、理由はなりたい職業への見通しを持てたからである。この山武地区でその見通しを作ることが出来ないかを考えた時に、成田空港への就職率が上がる可能性があることから、学校が英語など何かに特化した形で成田空港への就職のパイプを作ることにはできないだろうか。就職率が上昇することはもちろん、ここ山武地域であれば、空港までの通勤も決して不便ではないため、地元での定住率も高くなるのではないかと。何かに特化しそれが就職へと繋がり、将来の見通しを持つことができると、統合も一つの選択肢ではあるが、何かに特化して存続することも一つの道ではないかと考える。その学校は、必ずしも定員が多くななくても良い。高校卒業後の道のりを築き、未来へ繋げることもこれからの大きな柱になると考える。

【委員】

非常に難しい問題である。地域経済に与える影響を考える必要がある。地域に所在する高校を念頭に置いた街づくりを進めてきたところがある。そこに対するインフラ整備により、地域経済が発展してきた。本市のことを考えれば、残していく方向で考えるのが街づくりの軸となる。そのためには、我々行政がどのような貢献ができるのかを考える必要がある。今回の協議会は、県立高校についての検討であることから、オール千葉県で考えていただきたい。郡部から都市部へと生徒が流出している事実がある。これを、都市部から郡部へ持ってくるような方策、特色のある学校づくりや教育の場の提供について考えていただき、広い視点で適正配置の在り方を議論いただけないだろうか。万が一、地域から高校が無くなると、地域経済をはじめ街は衰退していくことだろう。街から高校生姿がなくなると大変なことになる。そうならない様に、我々も知恵を出していかなくてははいけない。

【 委 員 】

20年ほど前は、人口が減り若者が少なく子どもがいないという状況は考えなかった。それが今は、地域の子どもの数が10分の1になっている。この状況で地域の運営をどうするか考えるが、人が少ない若い人が少ないと言うしかない。仕事を中心に考えれば、通勤の面から職場の近くに住むことを考える。地元から離れた職場となると、ここに留まることはなくなってしまう。また、今は農業などの家業を継ぐことを考えることはなくなってきた。地元として何ができるかは難しいところであるが、街づくりはまず住む人を増やし、次に職場を増やす。そうしないと人は集まらない。

地域が学校に対してできることは、地域の安全・安心を確保すること。安心して通学できるよう、県や市に道路の拡張等の改修工事を依頼している。昨年、八街市で小学生の死亡事故が発生していることから、未然防止の対策を作ることが必要である。人口を増やすことはできないが、道路の改修等はすぐにできる。生徒が安心して通学できる通学路、保護者も安心して通学させられる環境づくりに取り組むことが、私たち地域の役目と考えている。仕事先や学校の選び方、その他様々な事が多種多様になっている。子どもの数はすぐに増えない。学校の新たな魅力づくりに取り組んでいただきたい。

【 委 員 】

昨年から学校の協議会等に関わらせていただき、どうしたら地元の人を呼び込めるか議論している。私自身が高校生の保護者だが、子どもによって特性は様々である。何かに特化する事で生計を立てられる様な、生きていく力を身に付けるクラスなどがあっても良い。とにかく、生きていてくれれば良い、楽しんで高校生活を送って欲しいという思いである。

【 座 長 】

教育の根源に関わる大事な考えである。

(6) 地域連携協働校について

【 座 長 】

資料4に沿って、議事を進めていきたい。事務局より説明をお願いします。

≪ 事務局 ≫

資料4について説明及び他県の取組について紹介

【 座 長 】

資料4の説明、及び他県における県立高校と地域の連携について紹介して頂いた。地域連携協働校の在り方や山武地区での可能性について、意見を伺いたい。

【 委 員 】

質問である。資料4の口頭説明において、ICTを活用した課外講習という表現があった。資料から、ICTを活用した遠隔合同授業を行うと理解していた。授業であれば単位認定されるが、課外講習では単位認定されないと思うが、この扱いについてはいかがか。

【 座 長 】

今の質問についていかがか。

≪ 事務局 ≫

連携協働校を指定する際に、協力校を指定し、遠隔授業を行うこと想定としている。よって、先程の説明にあった課外講習という表現については、遠隔授業を推進していくと訂正させていただく。

【 座 長 】

質問に対する回答はよろしいか。単位認定を行うコンソーシアム的なイメージでよろしいか。

≪ 事務局 ≫

そうである。

【座長】

全く同じコンセプトで全国一律に、という状況ではないようだが、各都道府県の現況に照らし合わせて、暫定的な側面もあるかもしれないが、地域での学びの今までにない可能性を求めていくことについて、意見を伺いたい。まずは、本日欠席者の意見はどうか。

※欠席者の意見

- 地域コミュニティや企業、大学などの資源を活用した実践的な学習機会の提供といった教育プログラムの充実、地域のイベント参加や課題解決などによる学校と地域コミュニティの連携強化など、地域社会全体の発展と教育の質の向上に寄与する重要な取り組みと考える。
- 「地域連携協働校」は、地域住民と学校区が密接な関係にある公立小・中学校には有効な取り組みと考える。適正規模に満たない県立高校の経営手段としての導入には、慎重な検討が必要と考える。
- まず、用語、基本的な構想について整理することが必要に思う。「地域連携」「地域連携活動」「地域学校協働」と類似する言葉が千葉県教育委員会ホームページで確認できるが、「地域連携協働校」と合わせて、十分に説明されていない。私自身の不勉強もあるが、これらに違いがあるのか、同一のものなのかさえよくわからない状況である。教員は無論であるが、生徒や保護者、地域住民に十分理念を説明し、理解いただけないと協力、連携は難しいのではないだろうか。

【座長】

今後どうあるべきか、言葉の概念や守備範囲について暫定的でも明確にすると良い。現状での地域における中等教育の在り方や初等教育の在り方を含めて考えた時の地域連携協働校の存在や意義、可能性などについて御意見いただきたいがいかがか。

【委員】

地域社会全体の発展と教育の質の向上に寄与する重要な取り組みである、との意見がその通りであると感している。

【座長】

具体例も紹介いただいたが、実際すでに行われている事例も少なくない。それが学校の存在の存否に関係し、そのこととセットになっているかは限定されるかもしれない。地域の中に入って学ぶのか、教室で学ぶのか、違う所で学ぶのか、様々な学びの機会の提供或いは転機にもなる可能性もあると思う。各委員で感じるところはあるか。

【委員】

私の住む近所の神社の祭りに、その地域に所在する高校の生徒が参加している姿を見かけた。この地域は、この高校なしには語れない状況である。町おこしも盛んであり、非常に良い関係が築かれていると感じている。高校としても、学校設定科目などを活用したカリキュラムを編成することで、地域と協力していくことは可能だと思う。また、生きる力の育成にも繋がると考える。

【委員】

地域連携協働校そのものに当てはまるかは分からないが、地域との連携は非常に大事である。小学校に勤務した際に、小学生の体験学習で地元の高校生に來もらい教えてもらうなどの交流があり、小さいことから高校生との関わりがあった。地域を知ることが高校生にとっても良いことであり、地域の方にとっても高校生との交流により頼りにすることがあると思う。地元の高校に送って欲しいと言われることがあるが、中学校では自分の好きな学校へ行くように指導している。それが遠方の高校であろうと、地元であろうと、その子が成長できる高校であれば良い。しかし、結果として地元の高校を選んでいる生徒たちというのは、地元の高校生との関わりや、学校の様子から安心して学校生活を送れそうであるなどのことから高校を選択しているように感じる。こうした、中学生や小学生或いはその保護者との交

流を行うなどの地道な努力を継続することが、高校の将来に繋がると思う。

【座長】

大学でも家庭関係が希薄になったと感じるとともに、地域社会でも同様であると感じた。世代を問わず、竹串を通すような繋がりをどう持つかの大切さについて、皆さんがお考えであると感じた。他に意見はあるか。

【委員】

子どもと大人の考えがずれていると感じる。子ども達の選ぶ進路先の基準と大人が勧める基準が違う。子ども達は理数科がすごいとは感じていない。英語科に対し、特別な思い入れのある生徒はいるが、そうでない子ども達もいる。こういった部分にずれを感じる。また、高校のパフレットを見ると、卒業生の活躍について多くが国立大学の名前が出ているが、現状がそうであるかというところでもない気がする。専門高校のパフレットで大学に進学できると紹介されているが、そうであるならば普通高校へ進学したらよいと感じる。専門学科に興味関心があるから、その高校へ進学するのだと思う。人気があるのが調理国際科や服飾デザイン科がある佐倉東高校である。特に服飾デザイン科は佐倉東高校にしかなく、服飾関係が好きな生徒が集まる学校だろう、自分と同じような性格の生徒が集まるだろうということに安心してその高校を希望する生徒が多い。子ども達の感覚はそういった所だと思う。魅力のある高校を作ることが必要である。子ども達にとってみれば、「私はこの高校にこれがあるから行きたい」と考えて行く理由を探している。我々大人が考えていることと違うのではないかと感じる。以前、ある高校の先生に学校の特色を伺ったところ、「分からない」「これから作る場所である」と回答された。結局、偏差値の輪切りで高校を選んでしまっているところがある。子ども達の中には、高校の進学目的について確かな意見を持った子もいる。こういった子ども達のニーズに応えてあげたい。子どもと大人の感覚のずれの観点から見れば、今、子ども達には広域通信制高校が人気である。自分の好きな時間に学べるといったニーズは確かにある。そういった高校が近くにあれば、受け皿になってくれると思う。我々は、どちらかという子ども達の特色を考えて進路相談に応じるが、子ども達は大人とは違う考えを持ち、自分の好きなスポーツに取り組むために通信制高校に行きたいといった明確な意志を持っている子もいる。こういった多様な子ども達のニーズに応えられるものが出来ると良いと感じる。

【座長】

コロナ禍を経て、図らずも一気にインフラが整わざるを得なかった。本学としても仕方がなかったことではないと感じる。新しい可能性を、どのように活かしていけるのかが問われている。二者択一のどちらが良いかという議論ではない。パッケージを構想し、時限的に教育実験をしながら前へ進んでいく段階に入っている。日本が目指すべきは、そういったところの活路を切り拓いていく意識を持つことだと考える。大学に限らず、地域の教育が繋がっていく道具を手にしたことは非常に大きな意味を持つ。通学の問題や時間が限られて仕方がないということではなく、自分が時間を選んでいくといったベクトルを逆転させたところに、新しい教育の意義や価値が光ってくる気がしている。地域連携協働校の考え方も、教育のスキーム全体の中でどうしていくのかを考えることも必要になってくる。

本日第3回目ということで最後になってしまったが、協議会の場において様々な立場の委員の皆様から御意見を頂戴できたことは次に繋がるものとして良かったと思う。時間の関係上、クロージングに入らざるを得ないが、またこのような事に関して協議できる場で意見交換ができると良いと思う。

最後にその他として、何か意見等はあるか。

(特になし)

特に無いようなので、以上で協議会における進行役としての役目を終了させていただく。皆様、進行等に御協力いただき感謝申し上げます。また違う場でも御意見等を頂戴できればと思う。

それでは、進行を事務局にお返す。